

# 女性の神秘的な力：Margaret Oliphant の *Phoebe Junior*

松本三枝子

## 序

*Phoebe Junior* は Margaret Oliphant (1828-97) が書いた Carlingford series の最後の小説である。カーリングフォード・シリーズとは、1861年に発表された *The Executor* に始まり、*The Rector*, *The Doctor's Family* (1861-62), *Salem Chapel* (1862-63), *The Perpetual Curate* (1863-64), *Miss Marjoribanks* (1865-66), *Phoebe Junior*<sup>1</sup> (1876) の7作の小説から構成されている。オリファントの作家としての地位を揺るぎないものとしたこのシリーズの中で、最後の2作である *Miss Marjoribanks* と *Phoebe Junior* は独身の女性を主人公にした物語であり、彼女達の名前を共に題名にしている。Margaret Rubik は “The Subversion of Clichés in Oliphant's Fiction” において、ルシラ・マージョリバンクスやフィービー嬢が「感傷的にならない精力的で自立した女性でありヴィクトリア朝小説の典型とは異なり、むしろ伝統的には男性的な特質を持っている」(51)と分析し、これらのヒロイン像の特徴を指摘している。

ブラックウッズ誌での長年にわたる彼女の書評から、保守的な作家と見なされてきたオリファントであるが、上記の2作特に『フィービー嬢』はむしろ強い精神力と知性を合わせ持った新しいヒロイン像を描いている。結末でヒロインが政治家の妻となるという意味では、ジョージ・エリオットの『ミドルマーチ』(1871-72)のドロシアを想起させる。『ミドルマーチ』と『フィービー嬢』はほぼ同時期に書かれているが、前者の時代背景は1830年前後の第1次選挙法改正の時期であるので単純な比較はできない。しかし保守的な社会状況の中で自己実現を求める女性像という観点からは十分に比較分析する価値がある。

カーリングフォード・シリーズの中で最も人気を獲得した『セイレム・チャペル』が出版されたとき、ジョージ・エリオットの作品と並び評された時期があった(Nicoll viii-ix)。加えてオリファントの自伝を読めば、彼

女がいかに同時代の偉大な女性作家であったエリオットを意識せざるをえなかったのかが良く分かる(15, 17, 157)。『牧師館生活』から『ダニエル・デロンダ』まで精選された小説で作家としての地位を守り抜いたエリオットと、極めて多くの小説や書評を生涯にわたり書き続けたオリファントの作家として姿勢は対極的に見える。しかし 1870 年代に入りヴィクトリア朝社会の繁栄に陰がさし、性のダブルスタンダード等のヴィクトリア朝的価値観にも疑問が呈されるような新しい時代のエトスの中で、エリオットとオリファントがどのような女性像を読者に示そうとしていたのか興味があるところである。

準男爵の叔父を持ち、領地付き牧師の未亡人として十分な遺産を約束されながら、それらを捨てて無一文のラディスローと再婚したドロシアは、高らかに自己実現を謳うことはもうしない。一方フィービー嬢は非国教会の牧師の娘であり、有力な実業家の信徒の息子と結婚することになる。この結婚を彼女は立身出世の機会と捉えて、資産はあるが知性に欠けるクラレンスからの求婚を受け入れることにする。俗物主義を克服したドロシアの結婚と、世知にたけ功利主義的なフィービー嬢の結婚は対照的に見える。

しかしふたりの女性像の描き方は、むしろ共通するものが多いと感じるのは私だけであろうか。『ミドルマーチ』とは異なりほとんど論評されることのない『フィービー嬢』を詳細に分析することで、1870 年代に生きた女性作家が共有した女性観を明かにしたい。

## I フィービー嬢は“feminine”か

『フィービー嬢』における作家であるオリファントとヒロインのフィービー嬢との関係はどのようになっているのだろうか。Elisabeth Jay がオリファントの死の直前に発表された“The Library Window”(1896)を分析していく中で作家としてのオリファントを「単なる女性の物語の語り手であるのみならず過去の経験に満ちた初老の女性であり、いまは年をとり静かに次世代の女性作家と彼女らの苦闘に対し保護者のような哀れみを感じている」(*Mrs Oliphant* 266)と述べている。この晩年の小説に行き着く前にも、後期小説のヒロインを分析して、Merryn Williams が「特に女性は人生が完全ではなく苦しみに満ちたものであることを受け入れねばならず、彼女たちの娘も同様の不幸を耐え忍ばねばならないことになる」(153)

という諦観に言及している。

女性作家としてのオリファントに関して、ジェイとウィリアムズによる分析は重なっていると言える。つまり様々な辛酸をなめ経験を積んだ成熟した女性として、オリファントはヒロインを描き、物語を語っているということになる。作家としてのこのような姿勢は、『フィービー嬢』においても共通するものと言えるのではないだろうか。この物語の中でフィービー嬢が克服せねばならない苦悩は、非国教会という彼女の身分であり、祖父が商人であるという彼女の出自そのものである。例えば次のような描写にそのような彼女の苦悩、あるいはジレンマが明らかになっている。

Poor Phoebe! she sat back in her corner and gave a gasp of horror and dismay, but, having done this, she was herself again. She gave herself a shake, like one who is about to take a plunge, rose lightly to her feet, took up her bag, and stepped out of the carriage, just as Mr. Tozer strolled anxiously past for the third time.<sup>2</sup>

病気の祖母の世話をするために母の故郷のカーリングフォードを訪れたフィービー嬢は、駅に出迎えに来た祖父のトツァーのみすぼらしい風貌に驚き、すぐには彼に挨拶する気になれない。トツァーはカーリングフォードのバター商人である。エリザベス・ラングランドが指摘するように、自営業の商人は使用人を抱えており裕福になりうるので、労働者階級と中産階級の境界領域に位置付けられる(123)。トツァーの成功物語は正にその好例である。カーリングフォード・シリーズの初期の作品である『セイレム・チャペル』では、トツァー一家は店の2階で生活しており、バターやチーズ等の商品の匂いが居間にまで漂っていて、上品とは程遠い生活をしていた。成功していまは店を息子に任せ自らは引退して、かつてのレイディ・ウェスタンの屋敷に住居を構えている。このようなトツァー一家の立身出世物語は、さらに彼の娘の上昇の物語を可能にしてもいる。

トツァーは非国教会のセイレム・チャペルで強力な信徒であり、重鎮でもあった。その娘であるフィービー・トツァー（つまりフィービー嬢の母親）は、牧師のビーチャムと結婚するが、商人の娘という出自を隠し牧師の妻という中産階級の地位を獲得するために、カーリングフォードからマンテェスターへ移り住むことにする。信徒を中産階級の華と賛美するビーチャムの現実主義は信徒の信頼を勝ち得て、ついにロンドンのリー

ジェンツ・パーク近くにあるクレセント・チャペルの牧師にまで出世する。カーリングフォードつまりトツァー家との血縁さえ隠蔽されれば、フィービー・ビーチャムは牧師の妻であり、フィービー嬢は牧師の娘である。それゆえビーチャム家はカーリングフォードを訪れることは決してなく、祖父母が孫に会うのは保養地等に限られるという周到さである。

そのようにして獲得され守られた中産階級の地位の恩恵に浴しているのが、フィービー嬢である。彼女がコパーヘッド家の舞踏会のためにドレスを選ぶ折に描かれている彼女と母親の趣味の違いは、育ちの違いを如実に表現するものでもあり、フィービー嬢の才覚を明らかにするものともなっている。

“It is a pity,” said Phoebe, with a glance at her mother’s full colours ; but that was really of so much less importance. “Black would throw me up,” she added seriously, turning to the glass. “It would take off this pink look. I don’t mind it in the cheeks, but I am pink all over ; my white is pink. Black would be a great deal the best for both of us. It would tone us down,” said Phoebe, decisively, “and it would throw us up.” (57)

金髪で血色のよいフィービー嬢は明るい色のドレスでは目立ち過ぎて統一感に欠けると言う。結局彼女は黒のドレスを選び、母親をびっくり仰天させるが、自らの魅力を最大限に引き出す彼女の選択は、彼女なりの知識に裏打ちされたものである。グリーンドレスを着せようとする母親に、色彩論を学ぶべきだとフィービー嬢は諫めている (56)。エリザベス・ラングランドはこの場面のフィービー嬢を、1860年代の「当世風娘」と重複させて自立心溢れる若い娘としている(55)。しかし注目したいのはバター商人の娘として育てられた母親とは明らかに異なる才覚をフィービー嬢が持っていることである。この才覚をどのように定義すべきであろうか。

非国教会ではあるが牧師の一人娘として、フィービー嬢は母親とは異なり十分な教育を受けている。ドイツ人の家庭教師に育てられ女子専門学校で講義も受けている(54)。ソフォクレスは読まないが、ヴェルギリウスは読めるとわざわざ言及されているから、彼女がラテン語を学んでいることが示唆されている (55)。それゆえ彼女は『ミドルマーチ』のドロシアのような男性にのみ許された学問に対する劣等感を持っていない。それでは男女平等主義者かと言えば、ジョン・ラスキンの性別分業論を支持している

のだから根源的な社会変革は望んでいないことになる。それゆえフィービー嬢は就職して自立することなどは論外で、結婚を自らの立身出世の機会と捉えている。その意味ではむしろ『ミドルマーチ』のロザモンド・ヴィンシーに近い思考回路の持ち主である。

工場経営者の娘のロザモンドがその美貌から開業医と結婚しながら、結局挫折を味わうことになるのに、『フィービー嬢』は正に女性版の立身出世物語で完結している。それゆえ Samuel Smiles の *Self-Help* の女性版と読むこともできる。しかしむしろ重要なのは、『フィービー嬢』が『ミドルマーチ』同様に男性中心的価値観に基づく社会構造への根源的な不信を共有していることである。フィービー嬢の立身出世物語の中枢に位置付けられた才覚は、19世紀初期の女性であるドロシアやロザモンドが獲得できなかった知識に根差している。

フィービー嬢は社会が男性中心に営まれており、女性が周縁に位置付けられているという現実を構造的に認識している。ドロシアが自らの知識の不足から自分の判断力や決断力に自信を持てなかったのとは対照的に、フィービー嬢は自分の判断に迷いが無い。夜会服の選択においても、祖母の介護を引き受けるときにも、メイ牧師の救済のときにも、そしてもちろん結婚相手の選択においても、彼女は誰の指図も受けず誰の助言も聞かずに自ら決断し、その決断は常に正しく良い結果を生むことになる。なぜなら彼女は経験豊かな成熟した作者により常に支持されているからだ。

つまり女性が生きていくには不利なヴィクトリア朝社会ではあるが、先達としての女性によりフィービー嬢は守られている。それゆえ20歳前後の若さでありながら、老成した風格を漂わせている。メリン・ウィリアムズは読者が好ましいと感じるようにはフィービー嬢は行動していないと批評し、裕福ではあるが愚かなクラレンスとの結婚を支持していない(85)。フィービー嬢が『マージョリバンクス嬢』同様に強い女性主人公の物語であることには異論がない。出版元であったブラックウッドがマージョリバンクス嬢の強い性格を好まなかったことは良く知られているが、エリザベス・ジェイが指摘しているように、1890年代に流行した「新しい女」小説の女性登場人物が男性を蔑視したり矮小化したりする傾向にオリファントは賛成していない(*Mrs Oliphant* 81)。強い女性を描こうとすると、彼女の周囲は弱い男性ばかりになるという問題に直面することにオリファントは気付いている。このような登場人物間のパワーバランスにオリファント

は極めて鋭敏である。

フィービー嬢は性差別を容認しているように見えるのだが、男性優位論には与していない。彼女は強い女であるが、女性的な魅力を十二分に持っている。さらに女性の役割、女の仕事をないがしろにすることがない。彼女のこのような現実主義こそ彼女の魅力である女らしさの根源にあるものだ。それは作為としての女らしさであり、異装としての女と言っても過言ではない。エリザベス・ジェイはこのようなヒロイン像を功利主義の原理に基づいて育てられた世代として次のように分析している。

Lucilla Marjoribanks and Phoebe Beecham. . . incarnate the practical outlook of a generation brought up upon utilitarian principles. Lucilla makes proud boast of her schooling in Political Economy and does not hesitate to apply its lessons to the more intimate world of personal relations. (*Mrs Oliphant* 224)

フィービー嬢はヴィクトリア朝社会の中で立身出世するために、女らしさを装っていると分析できる。彼女の自己実現は地位と名誉の獲得を望む建設業者のコパーヘッドと同様に極めて中産階級的で世俗的なものであった。作者オリファントはそれを肯定的に捉えている。それゆえ彼女はドロシアのような知の悲しみやロザモンドのような挫折を経験することなく、世俗的ではあるが幸せな結末を迎え満足することができるのである。

## II Dissenter の体制化

コルビーは『フィービー嬢』が非国教会への軽い嘲笑でカーリングフォード・シリーズを締め括っていると指摘している(74)。このシリーズはオリファントのスコットランド教会への信仰から、非国教会への親密さを一貫して表現している。しかしその一方でむしろ非国教会の体制化、あるいは形骸化とも受け取れる物語の展開が目につく。例えば『セイレム・チャペル』におけるアーサー・ヴィンセントの苦悩と挫折は、非国教会の中心的な原理である任意寄付制度に対する根源的な疑問であった。それは彼が牧師を辞任するときの言葉によく表現されている。「あなた方がお金により建て、財産として守っている説教壇を私は降りることにしました。(中略)私はあなた方の使用人としてあなた方の監督下にあるのか、それとも神の奉

仕者として神の下にあるのか、一体どちらなのでしょうか」(*Salem Chapel* 390-91)。

オリファントの小説には牧師としての職業を全うするための苦悩を扱った小説が他にもある。個性的なエドワード・アーヴィング牧師の伝記を書いたこともあり、彼女自身の兄が牧師職を途中で止めさせられたこともあり、オリファントはこのテーマに対して関心を持っていた。この観点から『セイレム・チャペル』はヴィンセントを主人公とする教養小説として読むことができるはずである。しかし実際はそのようには展開していかない。なぜなら非国教会の牧師職に対する根底的な疑問が、ヴィンセントにより提示され、それが作者により支持されているゆえである<sup>3</sup>。有望な若き牧師としてセイレム・チャペルに赴任したヴィンセントは牧師職を辞するのみならず、非国教会そのものへの不信ゆえにそこから離脱していくことになる。注意すべきはそのような彼の非国教会からの離反が挫折としては描かれていないことである。つまり彼が物語の結末で国教会へ親和性を持つようになることは批判されてはいない。このような作者の姿勢は『フィービー嬢』でも維持されている。

『フィービー嬢』の主題は、ラングランドも指摘しているように血縁の絆と階級を上昇する野心との緊張関係を詳細に描くことである(17)。そしてこの緊張関係に非国教会という宗教問題が深く絡み合っている。前述したようにフィービー嬢の祖父はカーリングフォードでバター商を営んでいる自営業者であった。彼はセイレム・チャペルの上級執事として活躍し地域社会の中で地位を固めていく。商売も上向きで、彼の娘のフィービー(フィービー嬢の母)はセイレム・チャペルの牧師のビーチャムと結婚する。ビーチャムは牧師として成功をおさめ、ロンドンの美しいクレセント・チャペルの牧師にまで出世する。牧師の娘であるフィービー嬢は、有力な信徒である建設業者のコパーヘッドの息子と結婚し議員の妻となる。この三代にわたる階級の上昇は正に、立身出世物語に他ならない。そしてその単位は個人ではなく家族である。このような成功を可能にしたのが、正に家族の絆であり、家族の愛情である。それゆえ三代目に当たるフィービー嬢がバター商のトツァー夫妻を祖父母として受け入れることに躊躇する自分を恥じている次のような場面がある。

She had to keep on a perpetual argument with herself. . . . "If this is what we

have really sprung from, this is my own class, and I ought to like it ; if I don't like it, it must be my fault. I have no right to feel myself better than they are. It is not position that makes any difference, but individual character," Phoebe said to herself. (139)

自らの出自を知りそれを恥じるという意識を、フィービー嬢は初めて経験することになる。彼女の母が結婚直後にやはり自らの出自である商人階級と決別することで、牧師の妻の地位を確かなものにしようとしたときと同じ意識を、フィービー嬢は痛感している。祖父母との関係を絶って両親の下に逃げ帰りたい衝動に襲われながら、しかし彼女は明らかに母親とは異なる決断を下している。

なぜなら祖母を支えながらハイストリートを歩いて行くとき、「もっと私にしっかり掴まって、おばあちゃん」(139)と言う彼女の言葉は、自らの血縁の絆を認め公にする決意表明であるからだ。トツァーの孫娘としてカーリングフォードに住むことは、自分が商人階級の出身であることを証明することにもなる。牧師の娘であるフィービー嬢にとりそれは身分落ちすることになる。それは国教会牧師の娘であるアーシュラとの関係でも明らかになる。ロンドンのコパーヘッド家での舞踏会では華麗に着飾りクラレンスを魅了するフィービー嬢と社交馴れしていない奥手のアーシュラだが、カーリングフォードでは二人の関係は逆転する。それはフィービー嬢の出自を聞いたアーシュラが失望し彼女の身分落ちを嘆くことから分かる(196-97, 205)。商人などの新興中産階級を信徒に持つ非国教会を、国教会の人々が蔑視していたのはよく知られているが、非国教会の信徒自身がある種のコンプレックスを国教会に対して抱いていたことが分かる。フィービー嬢や彼女の母のジレンマは正にそのようなコンプレックスに根差したものである。

しかしフィービー嬢や彼女の母とは反対の選択をした人物も登場する。それが非国教会により派遣されたアジテーターであるノースコートである。彼の攻撃の標的はコレッジの施設長である。この職はオックスフォード出身者のみに許される名誉職で年収£250が約束されている。アーシュラの父と兄でこの職に就こうとしているレジナルドは反国教会の集会で激しくノースコートに非難される。しかしながらレジナルド自身がこの名誉職に就くことに躊躇していることが語られて、国教会の内部にも自浄作用



や批判能力があることが示唆されている。ノースコートは国教会非難は極めて政治的なもので、Anglican Churchが国教であることを止めるべきだという立場である(164)。集会では熱狂的な支持を受ける彼であるが、彼が他の非国教会の牧師や信徒とは異なることが、語り手により言及され(240)、さらにクラレンス・コパーヘッドにより次のように強調されている。

“He’s not a common Dissenter, like the most of those fellows that have nothing but salaries. He’s well off ; he don’t [*sic*] require, bless you, to keep people in good temper, and toady to’ em, like most do. He’s as independent as I am ; I don’t say that he’s quite as well off ; but money always finds its level. I shouldn’t have thought of asking May to receive a common Dissenting fellow, like the rest.” (271)

国教会のメイ牧師の家の下宿人となったクラレンスはノースコートをメイ家のお茶に招こうとしている。ここでクラレンスが何度も用いている “a common Dissenter” という表現は明らかにある種の蔑称となっている。彼自身が非国教会であるにもかかわらず自分はもちろんだがノースコートもそれらの人々とは異なると異質性を強調している。必要に駆られてではなく、自らの選択により非国教会のアジテーターとなっているノースコートを、レジナルドが施設長となったコレッジに招き入れる場面がある。自らを糾弾した者を招き入れるレジナルドの度量に心を開かれ、施設の礼拝堂の美しさに魅了されるノースコートの心中が描かれる。ノースコートはメイ家の人々が普通の人々とは異なり、偉大な思想を熟知していると敬意を表している(259)。さらに貧者のために奉仕するレジナルドを見て、セイラム・チャペルがそのような奉仕活動をしていないことに気付かされ非国教会の欠点を認識することにもなる。

この第II巻12章はノースコートの転機であり、彼はこれ以後自らのそれまでの言動からすれば矛盾とも裏切りともとれる行動をとることになる。彼はメイ家を訪れるようになり、牧師館はアーシュラとレジナルド、クラレンスとノースコート、さらにフィービー嬢が加わり若い人々の社交の空間となる。エリザベス・ジェイは、初対面の非国教会の牧師を国教会の令夫人が自宅に招く『セイラム・チャペル』での場面をありえないというジョージ・エリオットの批判に言及している (*Mrs Oliphant* 147)。同じことが前述した場面にも言えるのではないだろうか。国教会と非国教会の対

立や相違が描かれて行く中で、この牧師館での宗教を越えた交流はどの程度に信憑性があるものなのか疑問が残る。しかしこの国教会の牧師館における宗教対立を越えた若者たちの交流が、これ以後の『フィービー嬢』の展開に重要な意味を持つことになる。それゆえここではノースコート为国教会批判ではなく、メイ牧師とその息子のレジナルドの度量の広さが評価されている。さらに負債のために心身共に疲労困憊して病床にあるメイ牧師の下に、アーシュラの代理として事情を尋ねようとするノースコートが発する、“I am Ursula now” (383) と言う表現は重要である。なぜならそれはノースコートが非国教会のアジテーターを止めたことを意味し、国教会の牧師の娘であるアーシュラへ愛を宣言したことにもなるからだ。

こうして分析をすすめてくれば、『フィービー嬢』においては非国教会の基盤の脆弱さや信徒が抱えているジレンマが暴露されていることがわかる。トツァーに借金をすることになるメイ牧師の家計を見れば、貧しているのは国教会の方であり、非国教会は商人階級の信徒から寄付を集めてむしろ豊かである。さらにそのような裕福な信徒により、拝金主義や俗物主義が非国教会に影響を及ぼしてもいる。そのような人物として造形されているのが、コパーヘッド父子である。興味深いことにコパーヘッド家もフィービーの家族と同様に三代にわたり階級の階段を上昇してきている。初代のコパーヘッドは土建業で財をなし、二代目コパーヘッドはさらに事業を広げ娘の家庭教師であった女性と再婚することで、それまではなかった中流階級の上品さ（ジェンティリティ）やリスペクタビリティがコパーヘッド家に注入される。ロンドンの非国教会のクレセント・チャペルで最も有力な信徒となった彼の願望は息子のクラレンスが議員となることである。成り上がりの二代目コパーヘッドのスノビズムは、無用で高価なものを好む芸術の愛好家として度々言及される(47, 49, 51)。コパーヘッドは自分と異なり役に立たず金のかかる息子のクラレンスを溺愛し、彼を議員にしたいと願っている。コパーヘッドの目から見れば、自分と息子は対極的に位置付けられる存在である。父親は土建業で人の役に立ち金を儲ける、一方息子はオックスフォードで教育を受けるが、落第してしまう。無用で高価な芸術品を愛好するように、金のかかる息子を受愛している。食器棚の中に飾られる壊れやすい磁器のようにクラレンスを愛でる父親は、明らかに自分にはない上品さを息子の中に見出して満足している。

しかしクラレンスが父親の家を離れ、メイ家の下宿生となるや父親譲り

の俗物主義が明らかになる。

He was so much his father's son that he had a sense of pleasure and triumph in being thus elevated; and he had a feeling, more or less, of contempt for the clergyman, "only a parson," who was to be his coach. He felt the power and the beauty of money almost as much as his father did. What was there he could not buy with it? . . . the prettiest woman going to be his wife, if that was what he wanted. (249-50)

つまりこの物語の中で登場人物はもちろんのことだが、その読者にも軽蔑され疎んじられる人物がコパーヘッドである。彼譲りの俗物主義と拝金主義を共有するクラレンスをなぜヒロインのフィービー嬢は選択するのであろうか。その選択は非国教会に対する皮肉として見なすことができるだろうか。前述したようにメリン・ウィリアムズはこの選択は読者の支持を得られないとしている。

しかしオリファントがこの選択を支持していることは明らかである。マーガレット・ルービクによれば、オリファントは身勝手に利己的であることを人間の資質として受け入れる類い稀な資質の持ち主であったということだ ("Subversion" 56)。それゆえオリファントはヒロインに模範的な態度を望んではいない。オリファントはフィービー嬢が通常の意味でクラレンスを愛しているわけではないこと、さらにそれをフィービー嬢自身が自覚しているにもかかわらずこの結婚を立身出世として選択していることを明らかにしている (*Phoebe Junior* 299-302, 388)。そしてこのフィービー嬢の選択は、デイル・クレイマーが分析する次のようなオリファントの批評家としての姿勢と呼応している。

Oliphant's way of viewing life—a cool appraisal of conventional behavior in terms of the actualities and necessities of life rather than romantic idealism—dominated her reviews for decades in the *Magazine*, and was comfortable for her audience. . . . (149)

空想的な理想主義よりも人生の現実や必要性により保守的態度を冷静に容認するのが、ブラックウッズ誌における彼女の姿勢であった。このような彼女の価値観からすれば、作家としてのオリファントが世俗的とも言えるフィービー嬢の選択を支持していたことは想像に難くない。前述したマー

ガレット・ルービクの分析と合わせて、決して理想的でも模範的でもないヒロインを容認するオリファントの現実重視の姿勢がここにはある。

さらにエリザベス・ジェイが指摘しているように、オリファントの小説はチャールズ・ディケンズとは極めて異なる方法であるが、中産階級である(*Mrs Oliphant* 206)。つまり彼女の小説の構想や登場人物の造形には、中産階級の読者の価値観が折り込まれていた。しかし重要なことは、オリファント自身の価値観が時にそれよりも優位に働くことがあるということである。明らかにフィービー嬢の結婚相手の選択には、そのような作家の価値観が優位に影響を及ぼしている例となる。フィービー嬢の精神的成長とそれに見合った幸せな結末を望む読者を満足させるという観点からは、フィービー嬢の結婚相手は国教会の牧師ではあるが、紳士であるレジナルドの方がむしろ望ましい。それにもかかわらずフィービー嬢にクラレンスを選択させたところに、極めてオリファントらしい選択がある。それは模範的選択ではないが、現実的選択として容認されるべきものなのだという強い作者のメッセージがそこにはある。このような意味を持つフィービー嬢とクラレンスの結婚は、現実を重視するオリファントにより『セイレム・チャペル』以来の非国教会の体制化というカーリングフォード・シリーズの流れの中に位置付けられている。

それではそのような特異な選択をしたフィービー嬢はどのように表現されているのかさらに詳細に分析したい。

### III 女性の神秘的な力

夜会のためにドレスを選ぶ場面でのフィービー嬢の描写で、オリファントは当時流行であった「当世風娘」を意識しているとエリザベス・ラングランドは分析している(55)。つまりフィービー嬢は新しい時代のヒロイン像であり、自立心旺盛な女性として造形されていることになる。さらに男女の教養小説の型の違いに注目したリンダ・ピーターソンによれば、フィービー嬢の分析は次のようになる。

... Phoebe gets full treatment in the finale, too, with her husband Clarence functioning only as a detail. By constructing the last chapter to focus on Reginald, Northcote, and Phoebe, Oliphant challenges the assumption that

only the male *bildungsroman* can trace a pattern of achievement and growth. Phoebe's "Career" gets the equal treatment it deserves. (77)

男性の教養小説が、公的領域で認知され仕事を得て行く物語であるとするれば、女性の教養小説は、目覚めの物語であり私的領域である自らの家庭を獲得する小説である。ピーターソンはオリファントの後期の小説が、このような男女の教養小説の型の違いを乗り越えているという分析である。なぜならフィービー嬢の結婚に関するオリファントの扱いは男女による階層的な価値観を共有してはいないからだ。むしろ公的領域と私的領域の融合としてフィービー嬢の結婚を取り上げている。物語の結末でレジナルドやノースコートが成長をとげ、たとえば前者が父の跡を継ぎ教区牧師となるように、フィービー嬢の結婚もそのようなキャリアとして位置付けられている。彼女がこのような結婚を手にするまでに成長したのも、またこれからこの結婚を契機としてさらに発展する可能性を持つことができるのも、彼女自身の生き方を模索した成果である。

彼女自身による生き方の模索は主にふたつの側面から分析できる。第1は家族の絆と階級の上昇に伴う軋轢をどのように処理するかという問題である。この問題については前章で分析をした。第2は国教会の牧師であるメイを経済的破綻からさらに社会的失墜から救済するために彼女が積極的に関わったことである。なぜ彼女は彼の救済にあれほど犠牲を払い、骨を折ったのであろうか。この問題は彼女の人物造形の極めて重要な部分であるので詳細に検討を加えたい。

負債を工面するために疲労困憊し病床に倒れたメイ牧師を看護するフィービー嬢の心中を語り手は次のように述べている。

How strangely she felt towards him, as she sat there in the grey of the morning, sole guardian, sole confidant of this erring and miserable man! The thought ran through her with a strange thrill. He was nothing to her, and yet he was absolutely in her power, and in all heaven and earth there seemed no one who was capable of protecting him, or cared to do so, except herself only. (371)

フィービー嬢はメイ牧師の窮状を正確に把握する唯一の人物であり、彼女の祖父であるトツァーへの借金の返済から彼を救済できるのは、彼女の決断と行動力にかかっていた。彼女の懐に迷い込んだ窮鳥として、初老の

メイ牧師を眺めている彼女がいる。男女のそして年齢によるヒエラルキーの完全な逆転がここにはある。フィービー嬢は自立した個人として彼の救済のために誰ひとり相談することなく行動して行く。

メイ家の女中から信徒のコッツディーンにメイ牧師が借金をしていたこと、その融通手形を裏書きしたのがトツァーであることなど家族も知らない彼の借金の真相を聞き出す。コッツディーンには真相を公にして、メイ牧師を社会的に失墜させることがないように説得する。その一方で祖父の家にある融通手形を奪い自らの懐深く隠してしまう。£150の手形が突然紛失したことに気付いて、トツァーは怒り狂うが、彼女は決して譲らない。行動力、決断力そして知力に優れた人物として彼女は描かれている。牧師館に集う若者たち、アーシュラやクラレンスはもちろんのこと、ノースコートやレジナルドさえも凌ぐ、最も優れた者として彼女は描かれている。そしてこの事件がフィービー嬢の成長を明らかに語る経験として位置付けられている。

それゆえこの事件とクラレンスからの求婚、さらに彼の父コパーヘッドとの和解は、祖父であるトツァーとの戦いを制した彼女には当然の結果であったと言える。なぜなら血縁の絆と階級の上昇のジレンマに悩みそれを解決した彼女は、コパーヘッドの望むものが見えていたからだ。コパーヘッドとフィービー嬢は表層的には対立しているながら、その実は共通の目的に向かって突き進んでいたと言える。それは家族という単位に基礎を置いて階級の階段を上昇して行くことである。物語の結末でフィービー嬢が書いた演説原稿を議員となったクラレンスが読むというのは出来過ぎた話である。しかし彼ら二人の出自を考えると、バター商と土建屋という上品とは言い兼ねる祖先から三代を経て彼らが現在の地位、国会議員夫妻というこの上なく申し分ない社会的かつ政治的地位を獲得できたのは、やはり家族の絆という、世代を越えた愛情によるところが大きい。

メリン・ウィリアムズが指摘しているようにオリファントが夫婦の関係よりも母子の関係のほうがより基礎的であると考えていたという分析は、ここでも有効である(162)。 *The Marriage of Elinor* (1892) においてエリノアが妊娠しているながらも夫と別れ母親の家に戻り、母と娘そしてその子供という変則的な家族をオリファントがむしろ好意的に描いている点にウィリアムズは注目している。 *The Marriage of Elinor* はオリファントの晩年の小説であり、彼女の元来持っていた家族重視の価値観が隠しだてな

く描出されている。彼女の自伝を分析した折、子供には溢れるほどの愛情が至る所に書かれている一方で、夫に対してはほとんど沈黙を守っていることに印象付けられた。この沈黙の意味するところは単純ではないが、彼女が家庭を重視していたことは強調されている。エリザベス・ジェイはこのようなオリファントの姿勢を作家という職業を家庭に優先させているわけではないというヴィクトリア朝女性作家の弁明と見なしている (*Mrs Oliphant 27, Autobiography xi*)。確かに家計のために質ではなく量を重視して多くの小説を書き続けねばならなかったというオリファントの弁明は鵜呑みにはできない。しかし彼女の自伝を読んだ者には家庭の中核を夫婦ではなく親子の関係に置いていることは、否定し難い事実である。『フィービー嬢』においてそれが如実に語られるのが、クラレンスとその母親の関係である。

コパーヘッド家の中核はコパーヘッド夫妻ではない。この家庭はふたつの親子関係の軸で支えられている。父親は一族の立身出世の目標として息子を国会議員にすることを願望し、息子クラレンスを愛している。一方コパーヘッド家の家庭教師からコパーヘッドの再婚相手となった母親は、夫とは全く理解し合えずクラレンスを溺愛する。つまりコパーヘッド家には土建業で成り上がり現在の地位を築いた新興中産階級の父とその跡継ぎの親子の関係と、貴族を親戚に持ちながら家庭教師で生計を立てねばならなかった貧しいがジェンティリティやリスペクタビリティに執着する母親とその息子というふたつの親子関係が共存している。

ここでコパーヘッド夫妻の価値観は対照的である。しかしこのふたつの親子関係が願望しているものは、決して異なるものではない。それは息子のクラレンスを紳士階級として育てることである。それゆえ彼は能力不足ながらオックスフォードで教育されることになり、ヴァイオリンを弾く。さらに彼が国会議員となれば、それは父母共に正に望むところであり、彼らのスノビズムは満足させられる。クラレンスとフィービー嬢の結婚とはそのような家族の上昇願望という文脈の中で位置付けられるものである。それゆえフィービー嬢とコパーヘッドは最初こそ対立関係にあるのだが、じつは互いの目標がそれほど離れていないことに気付くことになる。なぜならコパーヘッドは知性がないクラレンスにはフィービー嬢の知力が必要なことを認めざるをえないし、フィービー嬢はクラレンスを愛しているわけではなく彼の父親の財力にひかかれているゆえである。この結婚が彼

女にとりキャリアとなるためには、結婚相手はクレセント・チャペルの有力な信徒であるコパーヘッド家のクラレンスである必要がある。

このように分析をすすめて分かることは、結末におけるフィービー嬢の結婚は、彼女のふたつの段階における成長の結果として位置付けられているということである。第1は、商人階級という彼女の出自と牧師の娘という現在の彼女の地位とのジレンマの克服である。このジレンマを彼女は母親とは異なり、自らの出自を隠蔽することなく明らかにした上で、自らの尊厳を守ること成功している。これは明らかに彼女の人格における成長と見ることができる。さらにそれは彼女が母親以上の認識を持つ人物として評価できることにもなる。第2は、メイ牧師を救済するために彼女が払った様々の努力であり、行動力である。彼の経済的破綻とそれに起因する社会的失墜を防止したフィービー嬢の行動力は、男性的な社会認識に基礎を置いているように見える。なぜなら彼女の行動の根源には、メイ牧師の状況があるがままに把握しようとする現実認識があるからだ。しかし彼の負債を肩代わりしているコッツディーンにこの秘密を暴露しないように説得し、祖父であるトツァーに融通手形の召還を諦めさせる場面などは、むしろ伝統的な女性の神秘的力を信用しそれを発揮する場面となっている。

それゆえこの段階におけるフィービー嬢の成長は、『ミドルマーチ』でのリドゲイトを救済するドロシアの姿に重複するむしろ伝統的な女性像である。周囲の誰もが手を拱いていた状況の中で、ドロシアが救済の道を切り開いて行く状況は、男性とは異なり女性だけに備わる神秘的力を信頼する展開ともなっている。エリザベス・ジェイはそのような過度に理想化されたドロシアにオリファントが批判的であると指摘している (*Mrs Oliphant* 116-17)。しかしメイ牧師を救済するフィービー嬢もそのような伝統的な女性像の系譜に位置付けられる。ドロシアと異なるのは、フィービー嬢を描くときに用いられている語彙である。“he [May] was absolutely in her power”(371)、“his true protector, to deliver him from what he himself had done”(372)、“[h]er self-confidence reached the heroic point”(378)など、彼女の行動や心中はこれらの場面では一貫して男性的な語彙により描かれている。それゆえドロシアと異なり、男性的な行動力の持ち主としてフィービー嬢を分析したくなるが、本質的にはドロシアに代表されるような女性の神秘的力にむしろ依るところが大きいと言うべきである。

なぜオリファントは新しいヒロインとしてフィービー嬢を描きながら、



自らが批判的であったこのような伝統的な女性像に依拠したのであろうか。それはウィリアムズの指摘するようにフィービー嬢によるクラレンスの選択が読者に受け入れ難いものであるという認識が、作家の側にも存在したということではないだろうか。宗教的な相違はあるもののレジナルドのほうが明らかに紳士として、望ましい結婚相手として描かれている。しかし貧しい牧師の妻になることは、フィービー嬢にとり立身出世ではない。裕福で社会的地位もあるコパーヘッド家のクラレンスと結婚し彼を国会議員にするために努力することで、初めて彼女の上昇願望は成就されるのである。しかしこのような余りに功利主義的な彼女の選択を和らげるために、彼女の人格の女性的な側面がメイ牧師の救済事件により強調されていると考えるべきではないだろうか。それは明らかに作家としてオリファントが新しいヒロインとしてのフィービー嬢の功利主義的な側面を読者に受容してもらおうための妥協として挿入された事件である。しかしこの事件は彼女の人格の形成には重要な事件となるものでもあるゆえ、完全に女性的伝統の中ではなく男性的な側面を強調するように語彙が注意深く選択されて表現されているのである。

読者の存在を常に念頭において小説を書いた職業作家としてのオリファントにより造形された新しいヒロインとしてのフィービー嬢が、願望する結婚に到達するためには、彼女が女性の神秘的力を発揮することで伝統的な女性の系譜にあることを、積極的に描く必要が作家の側にあったと考察できる。

## 結び

オリファントの人気シリーズであるカーリングフォード・シリーズの最後の小説である『フィービー嬢』で彼女は新しいヒロイン像の創造に挑んでいる。ブラックウッズ誌に掲載された書評などから保守的な作家として評価されるオリファントであるが、そのような評価からは逸脱するような女性像が、『フィービー嬢』には登場する。オリファントが作家としての地位を確かなものとしたこのシリーズにおいて彼女が敢えて読者の好みとは異なるヒロインを描いていることは注目すべきことである。

『マージョリバンクス嬢』を出版元のジョン・ブラックウッドが気に入らなかったとき、マージョリバンクス嬢のような強い女性は男性には冷淡

に扱われるとオリファントは嘆いている (*Mrs Oliphant* 275)。フィービー嬢も伝統的でヴィクトリア朝的な女性観からは逸脱した新しいヒロインである。しかし彼女の逸脱は決して単純ではない。なぜなら彼女はヴィクトリア朝的フェミニニティを必ずしも否定しているわけではないからだ。小説の中で言及されているように彼女はラスキンの男女の性別役割分担に賛成し、家庭を通しての社会貢献を女性の仕事と位置づけている。しかしその家庭は明らかに社会、つまり公的領域と直結している時空である。それゆえフィービー嬢はリンダ・ピーターソンも指摘しているように、男性の教養小説におけるヒーローと同じように、成長を遂げ自らの生きる場所を確保する。

クラレンス・コパーヘッドとの結婚は、彼女にとりそのようなキャリアとなる選択であった。しかしジョン・ブラックウッドが強いマージョリバンクス嬢を嫌ったように、読者はそのようなフィービー嬢の選択を支持していないとメリン・ウィリアムズは指摘している(85)。クラレンスの恋敵として登場するレジナルド・メイの度量の広さと暖かい人間性を捨てて、むしろ愚鈍と言ってよい男を選ぶのは彼の資産ゆえであると読者には感じられるからだ。さらにフィービー嬢が彼に愛情を感じていないことも明らかにされれば、彼女の選択が極めて功利的なものであることは否定できない。

オリファントが自らの小説の主人公に読者の模範となるような生き方を求めなかったというマーガレット・ルービクの指摘を再び想起したい (“Subversion” 56)。オリファント自身が人間の欠点をありのままに受け入れることができる作家であったということも、彼女の小説のヒロイン像に大きく影響している。しかし自らの権利はいささかも譲歩するつもりはないと言う弱冠二十歳のヒロイン (119) を読者が受け入れることができるように、オリファントは周到に彼女を描いている。

結婚に到達するまでのフィービー嬢の成長を描くときに、メイ牧師の救済という女性の神秘的力を発揮する事件を挿入している。教区の誰も、家族さえも彼を救済できない状況の中で、彼女は奇跡的に彼の窮状を把握し、誰の援助もなく誰に相談することもなく決断し実行して行く。この事件で描かれるフィービー嬢の姿は、『ミドルマーチ』においてリドゲイトの救済に尽力したドロシアに共通する。しかし異なるのはドロシアにとり女性の神秘的力は自己犠牲的な行為において発揮されるものであるが、フィー

ビー嬢においてはむしろ自らの決断力と行動力を発揮する試練として位置付けられていることである。それゆえ彼女はこれを乗り越えることにより、大きく成長し自らの価値観を肯定されて行くことになる。

なるほどフィービー嬢の結婚は極めて功利主義的なものであることは否定する余地はない。しかし「当世風娘」など新しい女性像が登場し、さらに煽情小説が読者の熱興的支持を受けるような時代の中で、オリファントが選択した新しい女性像を読者が受け入れることができるように、彼女はフィービー嬢が伝統的な女性像の系譜にも属していることを敢えて強調するような事件を挿入している点を強調しておきたい。それを職業作家としての読者を意識しての妥協であると断罪するよりも、彼女自身の中にあつた保守性と革新性の間での揺れと位置づけたい。

#### 注

- 1 *Phoebe Junior* の邦題は『フィービー二世』とすることも可能である。母であるフィービー・トツァーと区別し、男性の系譜を重視する世俗的伝統的思想を揶揄するオリファントの考えが反映された題名である。しかしこの論文では愛と結婚を主軸に論を展開していくので、母親との区別のみを重視して『フィービー嬢』と敢えてすることにした。
- 2 Elizabeth Langland (ed.), *Phoebe Junior : Margaret Oliphant*, 129、『フィービー嬢』からの引用は全てこの版によるので以後は頁数のみを本文中に記す。
- 3 詳細な分析は、拙論「マーガレット・オリファントの『セイレム・チャペル』：母親が物語を圧倒する」を参照。

#### Works Cited

- Colby, Vineta and Robert A. *The Equivocal Virtue : Mrs. Oliphant and the Victorian Literary Market Place*. Archon Books, 1966.
- Jay, Elisabeth, ed. *The Autobiography of Margaret Oliphant*. Oxford: Oxford UP, 1990.
- . *Mrs Oliphant : 'A Fiction to Herself'*. Oxford: Clarendon Press, 1995.
- Kramer, Dale. "The Cry That Binds: Oliphant's Theory of Domestic Tragedy". *Trela* 147-64.
- Langland, Elizabeth, ed. *Phoebe Junior : Margaret Oliphant*. Ontario: Broadview, 2002.
- 松本三枝子。「マーガレット・オリファントの『セイレム・チャペル』：母親が物語を圧倒する」『愛知県立大学外国語学部紀要』33号（言語・文学編），21-41，2001。

- Nicoll, W. Robertson, Intro., *Salem Chapel by Margaret Oliphant*. London: J. M. Dent, 1907.
- Peterson, Linda. "The Female *Bildungsroman*: Tradition and Subversion in Oliphant's Fiction." Trela 66-89.
- Rubik, Margaret. *The Novels of Mrs Oliphant*. New York: Peter Lang, 1994.
- . "The Subversion of Literary Clichés in Oliphant's Fiction". Trela 49-65.
- Trela, D. J., ed. *Margaret Oliphant: Critical Essays on a Gentle Subversive*. London: Associated UP, 1995.
- Williams, Merryn. *Margaret Oliphant: A Critical Biography*. New York: St. Martin's Press, 1986.